もう一粒のコメも残さん

いま子どもたちは No.405

森の学校 3

昨年9月、宮崎県立五ケ瀬中等教育学校の文化祭では、4年生（高校1年）が、五ケ瀬に米作をもたらした用水路について展示発表した。1927（昭和2）年に完成した用水路の敷設に尽くした旧村の村長後藤寅五郎の伝記の演劇も披露した。

それがきっかけで、いまは5年生になっている生徒らが今年10月下旬、地元有志が開いた「郷土の偉人　後藤寅五郎翁を語る会」に招かれた。

橋口篤志君(17)、本田良道君(16)、沼勁太朗君(17)が参加。最前列でメモを取り、山を掘り進める用水路工事の苦労や、寅五郎の人柄についての説明に聴き入った。

終了後、3人は地区の公民館長後藤國男さん(62)、用水路の管理人太田聖悟さん(52)とコメについて語り合った。

後藤さんは、かつて主食だったヒエやアワは、今ならとても食べられない味であること、コメがまだ貴重だった子どものころ、イモの葉や茎をコメと一緒に炊いて食べたことなどを話した。「今の人は食べ物が豊富でぜいたく。作ったものが廃棄されるのは残念」とこぼした。

橋口君は「もう絶対一粒のコメも残さんように食べる」。

本田君は「ヒエやアワとコメを、僕らが食べ比べることはできんですかね」と提案した。そうすれば、コメのありがたさが分かるはずだと考えたのだ。学校は全寮制だが、最近、寮の残飯の多さが問題になっている。

この提案に、沼君はひらめいた。学校の生徒たちを誘って用水路巡りをしよう。そしてヒエ、アワとコメの試食会をしてみよう。用水路が五ケ瀬の食文化を一変させた重要性も実感できるのではないか――。

「雑穀米を扱う業者に当たればヒエやアワが手に入るかも」

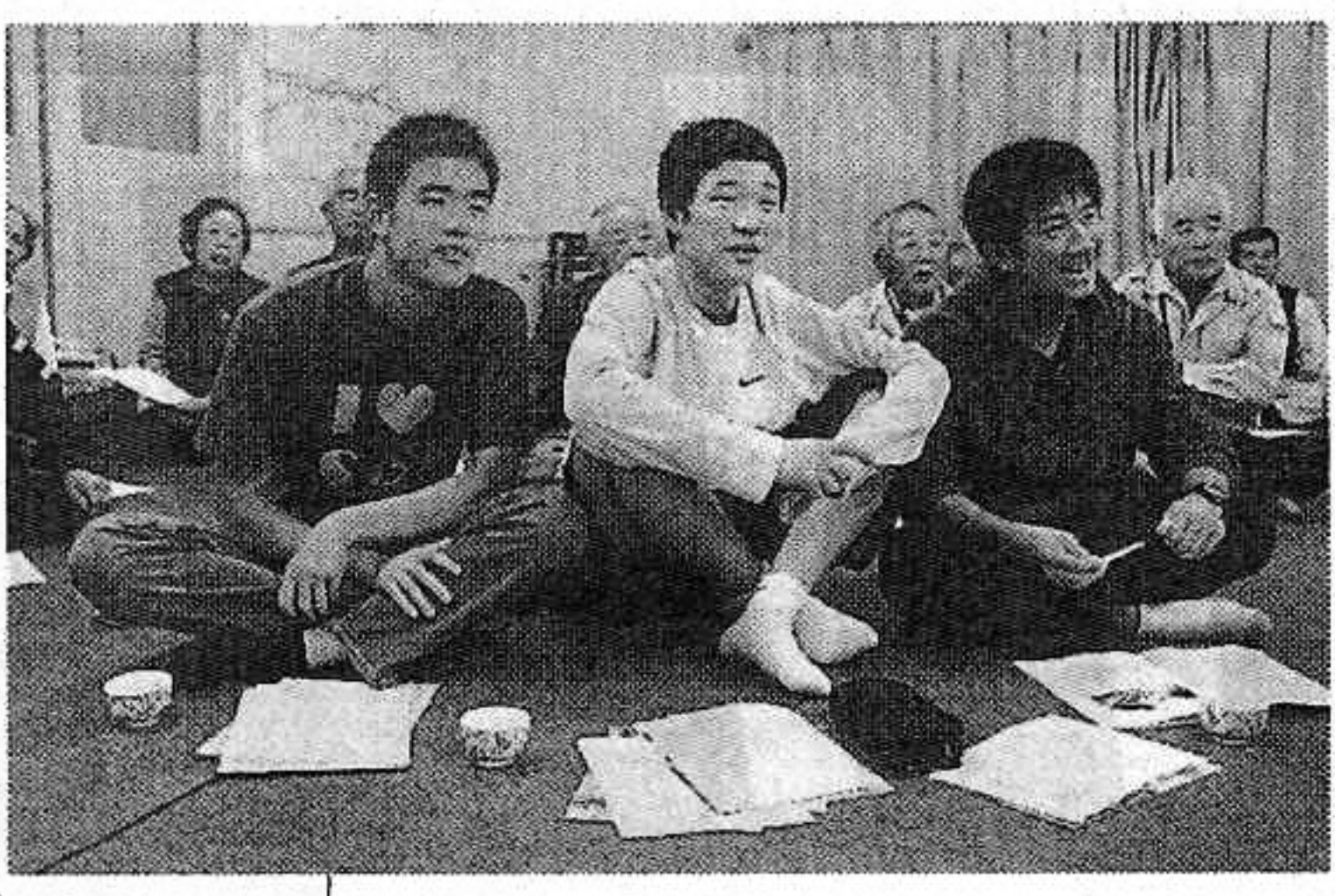
太田さんがヒントをくれた。

後藤さんは「『最近の若い人は』と思うとったけど、話してみると、いい意見を持っとる」と話し、3人に言った。

「今度はうちに遊びにおいで。新米があるから」

沼君たちは5年生のうちに試食会を実現させたいと思っている。

（斉藤純江）



「語る会」に参加した5年生。手前左から橋口篤志君、本田良道君、沼勁太朗君＝宮崎県五ケ瀬町